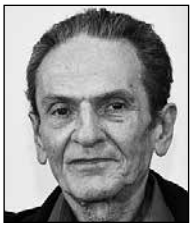
解説

久野量一



ルイス・ファヤッド（Luis Fayad）は一九四五年、コロンビアの首都ボゴタに生まれた。これまでに長編として『エステルの親戚（*Los parientes de Ester*）』（一九七八年）、『旅の同伴者（*Compañeros de viaje*）』（一九九一年）など多くの作品を発表し、コロンビアではガルシア＝マルケス（一九二七年―）のひと世代下の作家としてその名を知られている。一九七〇年代からヨーロッパを転々としていたが、八六年にドイツの招きでベルリンに渡って以来そのままそこに住んでいる。ここに訳出した作品を見つけたのは、ラテンアメリカの作家によってアラブやユダヤとのかかわりを描いた短編を収めたスペイン語のアンソロジー『砂の三角州――アラブ短編、ユダヤ短編』で、初出は二〇一一年だ。

ラテンアメリカにはレバノン・シリア地方とかかわりをもっている人が少なくなく、昨今の日本ではたぶん、ブラジル生まれのカルロス・ゴーンがもっとも名高い人物だろう。ゴーンがレバノン系であることは広く知られたが、コロンビアの歌手シャキーラ（一九七七年―）やアルゼンチンの俳優リカルド・ダリン（一九五七年―）、メキシコの実業家で大富豪のカルロス・スリム（一九四〇年―）もレバノン系である。アルゼンチンで大統領をつとめたカルロス・メネム（一九三〇年―）はシリア系である。アルゼンチンの憲法では大統領がカトリックであることが求められたため、彼は大統領になるために、イスラームからカトリックに改宗した。日本語訳がある作家となると案外少ないのだが、ブラジルのレバノン系＝ウトン・ハトゥン（一九五二年―）の『エルドラードの孤児』がブラジル現代文学コレクションの一冊として刊行されている（水声社、二〇一七年）。

ルイス・ファヤッドも、レバノン系の作家である。長編『方位の崩壊（*La caída de los puntos cardinales*）』（二〇〇〇年）では、彼の祖父や大叔父たちのレバノンからの移住とコロンビアへの同化が語られている。この短編はそうした人びとの移動と定住のエッセンスを抽出したものだ。

ラテンアメリカでは、アジア系が「中国人」と呼ばれるように、中東系の人びとは「トルコ人」と呼ばれる。ガルシア＝マルケスの短編を読んでいると「トルコ人」とは頻繁に出会い、『予告された殺人の記録』では、滅多刺しにされた主人公がナサールという姓を持つアラブ系で、父が移民第一世代、父とも恋人ともアラビア語で話している。

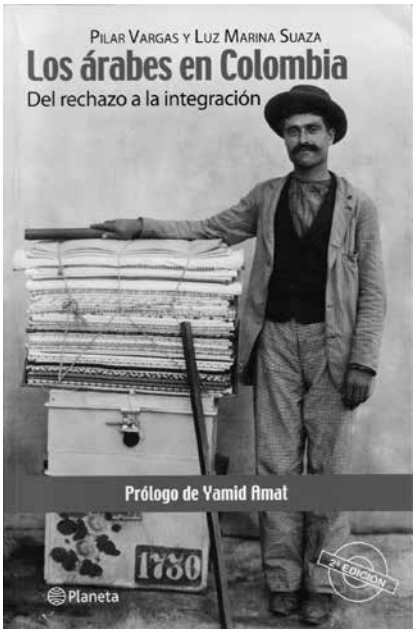
コロンビアへのシリア・レバノン・パレスチナ系の移民の波はだいたい一八八〇年から一九三〇年代をピークとし、彼らの移動は小説のみならず、証言や史料としても数多く残っている。それによれば、彼らの多くが地上の楽園、希望、夢を求めて移住を選んでいる。もともとアルゼンチンやブラジル、米国（つまり大国）を最終目的地としていたが、すでにコロンビアに先に親戚が身を落ち着けていたりすると、彼らを頼って船を降りている。米国に渡っても大恐慌が原因でコロンビアに再移住したケースもある。

ベイルートからおよそ一週間地中海を航行してマルセイユ、そしてそこから大西洋を渡ってコロンビアまでは一か月くらいかかる。コロンビアの入り口はカリブ沿岸の街バランキーリャで、ここは欧米や中東からの移民の受け入れ窓口にして、内陸への出発点でもある。

この短編で素晴らしいと思うのは、とりわけ冒頭の一段落だ。ナジーブがいまいるボゴタから故郷のベイルートまでの道のりが、フィルム

の逆回しのように逆向きにたどられる。中央山脈、マグダレナ川、大西洋、そしてレバノン。レバノンとボゴタが交錯するナジーブの生を凝縮したこの数行を読み、翻訳しようと決めた。

20 世紀初頭のベイルート



ピラール・バルガス・アラナ、
ルス・マリーナ・スアサ・バルガス
『コロンビアのアラブ人』(ボゴダ、2007)

中東からコロンビアへ渡った 10 数名の家族の語り（インタビューの語り起こし）に、著者が当時の新聞記事や写真とともに解説を付している。1880 年から 1980 年までにコロンビアに渡ったアラブ人の歴史に関する貴重な資料である。